

涙からの旅立ち

涙からの旅立ち

ルカによる福音書 七章三六―五〇節

沖村裕史

イエスは、シモンと呼ばれるファリサイ派の人に招かれて、他のファリサイ派の人々と共に食卓に座っておられます。

ファリサイとは、「分け隔てをする者」という意味です。ファリサイ派の人々にとって大切なことは、「神の国、神の義」ではなく、自分たちの清さ、正しき、いわば「自分の義」であり、汚れた者、義ならざる者と見なした人々との接触を避けることでした。イエスが徴税人レビたちと一緒に食事をしたことを問題視し、非難したのは、そのためでした。そのファリサイ派のシモンが、今、イエスを自宅に招き、共に食卓に座っています。

なぜなのか、ルカは何も語りません。それでも、全幅の信頼からというのではなく、疑いと敵意を心に秘めての招きであったようです。誰かを食事に招くとき、最初の料理が出される間に、客の足を洗い清め、汗の臭いを消す香油を注ぐのが、当時のマナーでした。ところがシモンは、そういうことを何もしません。彼がイエスを招いたのは、丁重にもてなすためではなく、イエスを陥れ、恥をかかせようとの下心ゆえだったのでしょうか。

食事が始まると、そこに招かれざる珍客が入ってきます。シモンは、その客を「罪

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

深い女」と呼ぶだけで、その名前も告げません。なんとも失礼な話ですが、実際この女性はそうやって、失礼に扱われてきたのでしょうか。名前で呼ばれ、親しみをもって呼ばれ、人格的な交わりを結んでくれる人などいない。「あの女」「罪の女」と指さされ、蔑まれる、そういう女性でした。

その女性が突然、家に入ってきて、イエスの足を涙でぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、その足に接吻し、持ってきた香油を塗り始めます。福音を告げ知らせるために山々を行き巡って真っ黒になったイエスの足を、ファリサイ派の家に呼ばれて食事の席に着いても洗われることのなかった汚れた足を、罪に汚れた女が、これ以上ないほどに丁重に扱います。

とはいえ、これは異様で、また激しい行為です。シモンにとっても、思いもよらない出来事でした。「もしこの男が本当の預言者ならば」、彼は眩みます。「彼に触れているこの人が、どんな女なのか分かるだろう。彼女は罪深い女なのだから」。この言葉は、女性の行為を咎め、女性をおとしめると同時に、彼女との接触を厭わず受け入れるイエスに対する、嫌悪に近い感情を含んでいます。誰彼かまわず、招かれればその家に入って、飯をごちそうになり、酒も飲む、罪の女が入ってきて体に触れても一向に意に介さない、汚れの中で平然と汚れにまみれている。その姿に、シモンは今、疑いと敵意の眼差しを向けています。

彼女の罪が具体的に何であったのか。学

者たちは、彼女の罪は売春であったのではないかと推測します。彼女が運んだ甘い香りのする香油の入った石膏の壺が、近東地域の売春婦たちがしばしば身につけていた香水の小瓶と似ているからです。ルカもまた、性的な雰囲気さえ漂うその場面を、あるがままに描き出しています。シモンは、イエスが彼女の「触れる」ままにしていることに眉をしかめます。この「触れる」というギリシア語ハプトーは、単に触れるというだけでなく、「火を点ける、愛撫する、優しく撫でる」という意味を持つ言葉です。

彼女がイエスを愛撫し、その身を投げ出し、口づけをする。食卓の清らかさや預言者としての尊厳に最も似つかわしくない彼女のそうした振る舞いを、イエスは受け入れ、許しておられるように見えます。シモンの眩きは、「もし、正しいことと間違っていること、良いことと悪いこと、罪と義を区別することができない」とすれば、そんな預言者とは一体何者なのか、いや、それは真の預言者ではない」ということです。

ところがイエスは、彼女がどういう女性であるのか、その過去を問うこともなく、彼女を巡る風評に耳を傾けることもなく、ただ彼女の涙をそのままに受けとめられます。人の足を拭うことができるほどの涙です。それほどの涙をそのままに受け入れておられます。

愛する者の死に誰もが涙します。しかし死と無縁の涙もあります。三度もイエスを否んだペトロはイエスの言葉を思い出して激しく泣きましたが、その涙は後悔の涙ではありません。ペトロが泣いたのは、裏切られても決して見捨てることのないイエスの心に触れ、その愛を知ったからです。そして今、罪深い女は泣きながら、涙でイエスの足をぬらしします。罪を赦す方に出会っ

たという喜びと、その方への愛ゆえの涙だったのでしょうか。彼女の涙を、イエスは拭おうとはされません。ただ泣くにまかせられます。その涙を受け入れられます。

その涙に、彼女の大きな罪ゆえの、彼女の大きな愛を見ておられたからです。イエスはシモンに問いかけられます。五十デナリオンと五百デナリオンという金をそれぞれに借りた二人の人がいた。しかし二人はそれを返すことができない。すると思いがけず金貸しがその借財を帳消ししてくれました。この二人の内、どちらが金貸しを多く愛するか。シモンは答えます、「多く赦してもらった方」に違いない、と。

イエスは、彼女の涙の中に、大きな罪ゆえの大きな愛を見ておられます。そして大きな罪に見合う大きな愛の行為ゆえに、彼女に対して罪の赦しを宣言されます。この女性がどういう罪を犯したのか、そもそも本当に罪人なのかどうか、そんなことはどうでもいいことです。大切なことは、自分の義ではなく、神の国の福音―神の義としての罪の赦し―を宣言することです。この女性が罪から解放された後、自由になって、かけがえのないいのちを新しく生きることです。まさに甦らされることです。イエスは言われます。

「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」

「安心して行きなさい」を直訳すれば「平和へと旅立ちなさい」です。これは、この女性を、罪の鎖から解放し、新しく生かし、旅立たせていく励ましの言葉、餞の言葉です。と同時に、平和に向かって旅を続けるイエスからの誘いの言葉、招きの言葉でもありました。

「わたしと一緒に平和へと旅立ちとう」。
(二〇一八年五月六日、復活後第五主日礼拝)